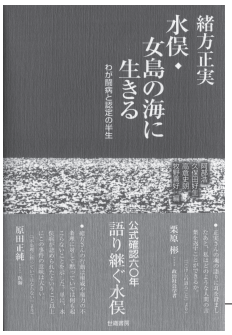
書評



緒方正実著
阿部浩・久保田好生・高倉史朗・牧野喜好編
『水俣・女島の海に生きる ― わが闘病と認定の半生』

世織書房、2016年

評者　萩原　修子
熊本学園大学商学部

本書は、1957年に芦北・女島の網元の家で生まれ、水俣病を抱えて生きつつ、政治解決からの切り捨て後に公害認定を勝ち取った著者・緒方正実氏の半生が綴られたものである。著者の家族・親族は、ほとんどが水俣病被害者で、心身、生業、社会関係に至る甚大な被害を受けてきた。認定申請を取りやめ、近代社会の矛盾を問いながら、水俣病との固有の対峙を表現してきた緒方正人氏は、著者の叔父にあたる。

本書の構成は、Ⅰ部に生い立ちから独立へ、Ⅱ部に水俣病認定への闘いが記され、Ⅲ部に水俣病とどうつきあってきたか、Ⅳ部に半生を振り返っての周囲の人々、そこで育った海への思いなどが語られている。最後に、水俣条約採択への願い（被害者代表としての挨拶）が挿入され、関係資料や年表が巻末に掲載されている。

私自身の読後感は、2009年に出版されていた著者の記録集『孤闘―正直に生きる』（創想舎）における「正直に生きる」の意味が、本書を通して、ようやく腑に落ちた思いだった。そして、私が水俣病に関心を持ったきっかけであった緒方正人氏とは異なった形で、「正直に生きる」という著者のあり方には、大きな示唆を得た思いだった。

以下、本書評では、「正直に生きる」という著者の一貫したメッセージを軸にして、ライフヒストリーの側面、水俣病の認定をめぐる事件史の記録としての側面を考察し、最後に、「正直に生きる」とは何かについて、触れていきたい。

まず、本書は自ら半生を語るというライフヒストリーである。Ⅰ部からⅣ部の語りは、著者が「熊本県から水俣病認定を受けた二〇〇七年から約二年間に、また二〇一〇年も加えた三年間で六回にわたりのべ四十数時間、東京や水俣で語った内容」（p.331）とされ、その作業は、関東や水俣在住の支援者によって行われたとある。すなわち、自らが綴った語りではなく、東京や水俣で支援者との「対話」の中で語られたものであるがゆえに、方言のまま、口語で臨場感がよく伝わってくる語りとなっている。そして、著者の類まれな生き方やメッセージが読み手に真摯にまっすぐ伝わってくる内容となっている。それは、著者の半生につ

いて、生い立ちや認定に至る道のりなど、いくつかの視点からわかりやすく構成されているためであり、語りにはその姿が現れない編者の力量の賜物なのだと拝察できる。

ライフヒストリーは、編者（聞き手）と著者（語り手）のあり方によって多様な形で作品となるものだ。聞き手と語り手の信頼関係、まさに「正直に生きる」語り手の姿勢に対する聞き手の深い敬意や感動なくして、本書は編まれ得なかった。それは、巻末の編者による解説に、「著者の記憶力と、自己を対象化し真摯に自問し続けてきた経緯には頭が下がる」（p.330）とあるように、著者の一貫した姿勢そのものが、聞き手・編者となった方々を動かし、その両者が対峙したダイナミックな場から、本書が生み出されるに至ったことが感得される。すなわち、著者の「正直に生きる」姿勢こそが、本書が世に出るための根源的な力であったと言える。

次に、水俣病事件における歴史の記録という側面からも、本書の意味は極めて大きい。1995年の政治解決で切り捨てられた後からの認定申請、行政不服審査など10年にわたる闘いの中で、行政の水俣病事件に対するあり方が細やかに描き出されている。一見わかりづらい「行政不服審査」や「認定申請」がどのようなものであるか、著者の語りを通して見れば、そこには単なる組織を通した文書のやりとりではなく、ある役職の固有名を持った顔のある、感情のある「人」が動いている出来事となる。水俣病事件の記録は膨大なものである一方で、こうした行政とのやりとりに「顔」が浮かび上がるような記録は多くはなく、貴重なものだ。

なかでも、私が最も感銘を受けた語りは、熊本県が「そもそも、視野狭窄の検査の結果に対して、あなたの環境や人格に問題があるんだ」と文書で回答してきたことに関して語ったところだ。

> 熊本県が書いたことで、熊本県が悪うございましたと言うけれども、そこにペンで書いた人がいるはずだ。その人にも責任があると思う。すべてがその人に責任があるとは思わないけれども、その人が『こういう文言を書いたら緒方さんは悲しむかもしれん、ショックを受けるかもしれんから、課長どうなんでしょうか』と一言言ってくれたらそこで防げたはずだ。それを、与えられた仕事だからと思って平気で何でもかんでも資料にしてしまう。だからその職員にも多少は責任があるはずだから、その職員を連れて来い。一緒に考えましょう。（p.131：傍点は評者）

著者は、このように、組織のなかに遂行した「人」を捉える。そして、行政の担当者と固有名で対峙する。その結果、担当者も「人」として覚悟を決める、涙を流す、心からお詫びをするという場面がいくつも見出されるようになってくるのである。

> あ、そうか、大組織といっても一人ひとりを変えていけば大きな部分を変えられるだろうと思ったんです。で、一人ひとり、組織の中にいる担当課の課長や職員に私は訴えよったんです。そうすると、その職員は課長に報告する、課長は部長に報告しに行く、

私が直接知事に言うときもあったけれども、これは知事に直接言うよりも部下の人たちに言ったほうがいいという場面では、実際変わったかどうかわかりませんけれども、繰り返し繰り返し一人ひとりに言ってきた。

すると行政からも人間らしい言葉が返ってくるようになったんです。（p.136）

このように、著者の率直な姿勢が、担当者の真摯さや覚悟を引き出していく。10年のうちには著者も申請を取り下げようかと思うこともあったというが、「私は、やっぱり行政に対してまだ期待をつなぐのも必要だろうと、その後もずうっと熊本県と私の水俣病をさらに考えていくことを新たに決意したんです」（pp.132-133）と語る。

そもそも、行政へのそのような期待は、「闘いもしないうちに相手を見切ることは私にはできない」（p.159）ということからきている。それはまっすぐに相手と対等に対峙するということであって、はじめから諦めたり、斜に構えたり、逃げたりしないということでもある。何より行政という「組織」にも「人」を見出し、その相手に対して「正直に生きること」を示しつづけるということだろう。著者のこの姿勢こそが、水俣病事件史に新しい局面を切り拓くことを可能にしたと言える。

さて、最後に、「正直に生きる」ことは、改めてどういう意味をもつものか。組織のなかにも「人」を見出し、その相手に対して、正面から向かい合ってきた著者の姿勢は見てきたとおりだが、向かい合うのは人だけではない。

苦しいでき事や悲しいでき事の中には
幸せにつながっているでき事がたくさん含まれている。
このことに気づくか気づかないかで、その人生は大きく変わっていく。
気づくにはひとつだけ条件がある。
それはでき事と正面から向かい合うことである。（p.223、p.260：傍点は評者）

これは、水俣条約国際会議開会式（2013年10月９日）における被害者代表としての挨拶（水俣条約採択への願い）の結びであるとともに、「全国豊かな海づくり大会」（2013年10月・熊本県）において、天皇・皇后が水俣病資料館を訪ねた際、語り部代表としての著者の講話の結びの言葉である。災禍としか思えない出来事、すなわち水俣病という未曾有の「出来事」とも一人ひとりが正面から、正直に向かい合うことによって、幸せにつながることに気づける、ということだ。

こうした境地に至るのは著者自身、大変な葛藤を経てのことだ。著者は、政治解決に至るまで認定申請を躊躇してきたことや、認定申請後の行政との闘いを通して、次のような気づきを得る。

・・・・俺が自分の水俣病をごまかしたり、水俣病が邪魔になったために認定申請を

しなかったということは、そもそも水俣病を特別扱いにしとったのは俺自身じゃないかと気づいたんです。自分がきちんと水俣病を受け入れることができないで、何で行政に批判が出来るんだと、問いつめ続けてきた。（p.72）

こうしてみると、著者の「正直に生きる」とは、何より自分と正面から向かい合い、自分を受け入れることだと言える。

同時に、認定を求めて行政や社会と闘った一〇年は、水俣病を行政に認めさせる闘いというより、“私自身が自分の水俣病を自らに認めさせる闘い”だったことに改めて気づかされました。（ｖはじめに）

本書で示される「正直に生きる」という著者の語りは、このように、自分自身に対して真正面から向かい合って生きることの大切さこそを伝えていることがわかる。その向かい方が、見てきたように、事件史に新たな局面を切り拓き、本書を生み出す力となったのである。

本書のような「語り」以外にも、建具職人である著者は、埋立地の実生の森の木から「こけし」を作って、彼の思いをこけしともに、多くの人々に手渡してきたという。水俣に縁のない人やいまだ事件をよく知らない人も含めて、こけしは手に取る人の「出来事」となる。彼らは、こけしを通して、いまだ終わらない水俣病事件と対峙し、それぞれの思いに向かう。

水俣病というのはまだまだ不幸だけれども、それぞれに与えられた課題に対して一人ひとりが向かい合っていけば、もしかしたら水俣病が不幸で終わらないかもしれないと一方で考えているんです。（p.203）

本書も、手に取る読者にとって、その出会いは「出来事」である。水俣病事件という未曾有の出来事を生きてきた著者の半生に、目を逸らさず、対峙することによって、我々はそれぞれの課題に向かい合うことの大切さを知るだろう。そして、自らの課題に向かい合うことによって、苦しく悲しい「出来事」も、もしかしたら不幸に終わらない、幸せにつながることに気づけるかもしれない。本書は、こけしと同様に、著者から届けられた希望、あるいは祈りのように思える。